

# 重要度を増すメキシコの中間層

久松佳彰



## 一. はじめに

「首を切られた死体、血みどろの抗争、そして刑執行のような殺人のニュースが目立つメキシコだが歴史的に長い目でみればメキシコにはより重要な別のテーマが隠れている。それは中間層の勃興である。」こんな風にウォール・ストリート・ジャーナル紙のコラムニストであるマリー・アナスタシア・オグレイディは二〇一二年三月五日のコラムを書き出した。翌々週の三月一八日にはワシントン・ポスト紙でウィリアム・ブースとニック・ミロフが『メキシコでは中間層が多数となっている』という見出しで長文記事を書いている。このように今年三月のアメリカ・ワシントンDCでは俄然メキシコの中間層が米国のメディアの注目を集めるようになった。その背景は、もちろん先般の七月

四日のメキシコ大統領選挙が接近してきたというスケジュールがあったのだが、直接の契機となったのは一冊の本の英語版の出版であった。

『メキシコ中間層社会—もう貧しくはないが、まだ先進国とは言えない—』（以下、『メキシコ中間層社会』と略）と題された書物が二〇一二年早々にウッドロー・ウイルソン国際学術センターから出版された（同センターのインターネット・サイトからダウンロード可能）。著者は、ルイス・デララカジェとルイス・ルピオである。デララカジェは経済学を修め、メキシコ経済省で自由貿易協定締結に取組み、世界銀行のエコノミストも経験した経済コンサルタントであり、ルピオは政治学を修め、メキシコのシンクタンクとして有名な発展研究センター

（CIDAC）を主宰し、新聞にもしばしば寄稿する知識人である。原著はスペイン語で二〇一〇年秋にメキシコで出版されたが、二〇一二年にタイミング良く英語版が出版されたことで一挙に注目を集めたのだ。

メディアの余波はもう一度メキシコに帰ってくる。メキシコの著名コラムニストであるエクトル・アギラル・カミンはミレニオ誌の三月二六日コラムで、前記のようにアメリカメディアが驚きを持って、メキシコの中間層社会化を取り上げていることについて紹介記事を書いたのだ。

このように米墨二カ国をまたがってひとつのトピックが取り上げられるのはインターネット上では珍しいことではないが、新聞雑誌を通じて南北を一往復するのはそれほどあることではない。それ

だけメキシコの中間層社会化というテーマはメディアの食指が伸びるものだったのだと言えよう。本稿ではまず『メキシコ中間層社会』を通して、メキシコの中間層の実情、そして重要視される文脈を紹介しよう。

## 二. 『メキシコ中間層社会』

本書は経済学者と政治学者の共著らしく、多くの数字と沢山の図表を使って、メキシコの中間層は幅広いものの厚みを持ってきており、重要な存在になってきたことを論じている。彼らが特筆するのは二〇〇六年の大統領選挙における中間層の役割だ。中間層には無党派層が多いだけに、彼らの投票行動がフェリペ・カルデロンの当選に大きく貢献したとのべている。そして、政治的不安定から中間層はもつとも損をするだけに、民主主義と中間層は適合していると論じている。そして、二〇一二年の選挙でも重要な役割を果たすだろうとしている。

現在のメキシコ人は親の世代よりも質量とも優れた教育を受けており、この一八年間で医療保健費用は三倍に伸びた。より多くの人が自分の家を持つようにな

り、現在は六〇%のメキシコ人が三部屋以上の寝室のある家で生活している。そして、自動車ローンによって自動車を買えるようになり、六五%のメキシコ人が一年に一回は自分の住む都市から出る旅行をするという。

もちろん、メキシコの所得格差はまだ存在しているが、社会の階層移動への希望は強くみられ、それは親が子につける名前にも表れているという。例えば女性名ではエリザベス、男性名ではジョナサンというように外国人風の名前が多くつけられているという。階層移動が今後現実化するかは、デジタル社会への適応と教育が重要であり、今後の政策的対応が必要であるという。また、メキシコは労働市場について十分な規制枠組みが揃っていないので、その法整備も必要である。労働市場ではその柔軟性の確保と労働者の権利の擁護とのバランスが大切である。社会の階層移動が中間層を支え、中間層がメキシコの安定と発展の基盤となっていく。すなわち、中間層こそがメキシコの未来にとって最も重要なのであると締めくくっている。

彼らの本は一般読者を対象とし

たもので、多くの興味深い論点が存在する。次節以降は、中間層の範囲とその意味あいについて議論しよう。

### 三. 誰が中間層なのか

『メキシコ中間層社会』では所得や消費を用いた中間層の唯一の定義を行っていない。多くの中間層の文献がするように消費と自己意識によって定義が行われている。そして、前節で述べたように自動車や医療保健費など消費行動に即した消費項目が増加している実情がデータで示されている。

本書では、それでも、社会経済指標を使った二種類の中間層の紹介が行われている。ひとつは、AMAI（メキシコマーケティング世論調査団体連合）が行っているメキシコ都市住民についての社会経済レベル指標である。AMAIは、社会経済レベルに応じてAからEまでの階層区分があり、そのなかで筆者たちは、広義では+CとCと+Dが中間層にあたり、狭義ではCと+Dがあたると述べている。+Dは平均よりやや低い所得を稼ぎ、なんらかの中等教育を受けていて、車をもっていない層。Cは平均程度の所得で、高校卒業

した家計主により支えられており、車を持ち、一年に一回は旅行に出られる層である。そして、+Cは平均以上の所得を稼ぎ、大学を出た家計主がおり、少なくとも二台以上の車を所有している層であるという。二〇〇八年の五万人以上の都市において、+Cは全体の一四%、Cは一八%、+Dは三六%であるので、狭義で五四%、広義で六八%ということになる（ちなみに、AとBは全体の七%、DとEは全体の二五%を占める）。

もうひとつの紹介は貯蓄ができる層が中間層以上であるという定義から家計調査を使って独自に調べた分析である。その結果、上位六割の家計が貯蓄を行っていることがわかり、ここから上位層を除けば中間層がわかることになる。仮にこれを一〇%弱とすれば中間層は五割強ということになる。副題にあるように「もはや貧乏ではないがまだ先進国水準ではなく、車を持っていない家計から二台以上持つ家計まで、多様な家計がこのなかに存在していることが想像できる。

ニャ・ニエト氏が勝利した七月四日の大統領選挙において中間層がどのような役割を果たしたかについては、今後の詳細な研究を待ちたい。最後に、中間層との関係では今回の選挙戦で興味深い出来事があったので紹介しよう。

イペロアメリカナ大学を訪問したペニャ・ニエト氏が州知事時代の業績を糾弾されたことに端を発し、同大学生一三一名が自らの学生証を見せて、抗議の真実性を訴えた動画を投稿サイトに掲載した。その後、「私は「二三一番目だ」とインターネット内外で抗議する#YoSoy132運動が盛んになった。これをメディアでは中間層による「アラブの春」を想起し、「メキシコの春」と名付ける人もいたのである。

しかし、イペロアメリカナ大学は日本の私立大学並みに学費が高く、上層もしくは中間層上位の子弟が通う大学として知られている。政治運動と多様なメキシコ中間層との関係は、更なる分析を必要とするであろう。

（ひさまつ よしあき／東洋大学国際地域学部国際地域学科教授）

### 四. おわりに

制度的革命党のエンリケ・ペ